看取りからみんなの輪に戻るまでの見守りロボットを使ったケアの実践

愛知県大府市
株式会社オリジン　フラワーサーチ大府
マネージャー
畠山　小百合

【発表に至った施設職員の思い】

ご利用者様が「今、何を望まれているのか」私達はそこからスタートしている。認知症で不安を抱えているご利用者様にはじっくりと話を聞く・ご利用者様の気持ちになり寄り添う。話の出来ない方や終末期の方には日々の様子や雰囲気から苦しいだろうか？痛いのだろうか？不安ではないだろうか？ご家族様からも今までの生活で楽しかったこと嬉しかったこと、ご利用者様への思いなど沢山の思いを教えて頂く。沢山の思いを聞く中で「私達はご利用者様とご家族様の思いに寄り添って何ができるだろうか」どう支えさせて頂けるのかを考えている。当施設では年間 30 名を超えるご利用者様をお看取りする中、最期を迎えた時に後悔や心に違和感が少しでも少なく出来るよう努めている。今回の発表では看取り傾向にあるご利用者様の思いに寄り添い取り組んだ事例をお伝えする。福祉の業界は人員不足に悩む時代であるが、只々ご利用者様ご家族様の思いに寄り添うことを考え知恵を出し合った結果、ケアをするスタッフが見守りロボットを活用しケアすることでみんなの輪の中に戻ることができた事例を発表する。

【看取り傾向にある S 氏に対するケアの思い】

S 氏は 83 歳女性で要介護 4。2017 年 1 月に入居、要介護 5 であった。40 年ほど糖尿病罹患歴があり 20 年程前よりインスリン治療をされていた。入居時には腎機能障害が認められており食事制限や水分制限を行っている状態であった。後々人工透析を必要とすることが考えられていたが、この時にはご本人様、ご家族様ともに積極的な治療は望まれておらず最期の時を静かに穏やかに迎えて行きたいという希望であった。S 氏はご自身が看取りの状態であることを理解しており、死への不安を多く感じられていた。また、腎機能が低下しており突然訪れる幻覚や妄想から、自分がおかしくなってしまったと思い、大声やベットでもがき苦しむ姿が見られていた。

私達はどのように S 氏とご家族様と寄り添い日々を穏やかに過ごして頂けるか話合いを行った。最期を迎えた時に後悔が少なく心に違和感を持たずに穏やかにその時を迎えられるよう、ご本人、ご家族様、介護士、看護師などチームで決めた方針は以下の通りである。

①慢性腎不全の症状による意識障害で幻覚や妄想からの不安や怒りから少しでも解放できる。
②浮腫の軽減ができる。
③好きな物、水分などの制限をしない。
④ご家族様との時間を大切にして面会や触れ合いの時間を多くとる。
⑤仲のよかった女性グループとの関わりを多く持つ。

【解決すべき課題と対策】

S 氏は幻覚・妄想が出ており不安を訴えることが多かった。何時その現状が起きるか分らないなか、私たちは少しでも不安な時間を減らすことが出来ないか考えられた。巡視の時間を多くする。現象が出やすい時間を知るなど検討をされた。その中で期待されたのが見守り介護ロボット「M ステーション」であった。「M ステーション」は心拍や呼吸を読み取れる見守り用の介護ロボットであった。このロボットにはカメラがついており随時様子を見ることで直ぐに対応が可能になる。幻覚や妄想による体動を確認できれば、直ちに対応でき安心感につながるのではと考えご家族様の同意を得た。

M ステーションを通してみた S 氏の様子

【行動した内容】

「M ステーション」をもちいて行われたケアでは、幻覚・妄想の様子が見られた時は訪室し話を聞いた。会話がかみ合わないが傾聴し感情を受け止めることで安心される様子がみられていった。ホットパックや手浴・足浴なども行いその日の気分などを確認していくと落ち着く日も徐々に見られ始め、車椅子で居室を出て仲のよかった女性グループと談笑する時間がとれるようになった。次第に女性グループが S 氏の居室に訪問し声を掛けてくださる事もみられはじめ、「そう、来てくれたの」と笑顔で過ごされる事が増えて行った。

ご家族様の面会の増加や減塩食を中止し好きな物を召し上がって頂いたことも効果となり少しずつ体調の改善が見られていった。

体調の良い時に行われた女性グループとの談話

【結果と考察】

看取り時期と想定して行われてきたケアは体調が改善し医師の指示の下、状態は安定したと判断された。2018 年 6 月には看取りのケアを解除した。現在は居室から出て談話スペースでお話を楽しまれている。ご家族様も「こんなに元気になるなんて思わなかった。ありがとうございます。」と声を掛けてくださった。この結果は一人ひとりが連携し S 氏の思いに寄り添った結果ではないだろうか。今回の事例では介護ロボットの活用と介護士や看護師が傾聴する時間が多く作れたことで安心した環境ができ体調の回復がみられたと考えられる。精神的な安定をきっかけに一緒に暮らすグループの女性が関われるようになったことで更に穏やかな気持ちになったと思われる。ご家族様の協力や医師の指示にも助けられ今回の結果となることができた。人員不足と言われる福祉の業界で知恵と皆様の協力により達成した一つの事例であったと考えている。

今後も「ご利用者様の為になにができるのか」を忘れず、スタッフ一同心に残るケアを実践してきたい。

お茶会に参加出来るまでに回復したＳ氏